

テレビ文化と女性—初期のNHK朝の連続テレビ小説の形式転換と女性視聴者との関係

黄馨儀

1 はじめに

女性とメディア研究の分野において、テレビドラマの描く女性像に関する研究成果は豊富に存在している。しかし、女性が重要な役割を果たすにもかかわらず、1961年から制作されてきたNHK朝の連続テレビ小説（以下、朝ドラと略する）に関する研究はいまだに少数であり、特に朝ドラの中で描かれている女性主人公に注目する研究は少ないのが現状である。

朝ドラの初期の放送によって、80年代以降の『おしん』（橋田，1983-1984）などの人気作品の土台が作られたと考えられる。本稿においては、朝ドラの長い歴史を時代区分し、朝ドラの成立背景を論じるために、その初期作品（1961 - 1974）について考察を行う。分析方法としては、初期の朝ドラの構成要素と内容の特徴を取り上げ、朝ドラで扱う内容と女性ヒロインの原型を確認する。朝ドラは1966年の作品『おはなはん』（小野田，1966-1967）において、形式が大きく変化した。この方向転換を考察し、その理由と初期の朝ドラの特徴を探りたい。さらに、初期の朝ドラと女性視聴者の関係についても注目したい。

1.1 先行研究

女性とメディアに関する研究としては、村松（1975）によるテレビドラマの描く女性像についての研究、村松・牧田（1985）によるドラマの描く家族像についての研究がある。しかし、朝ドラの女性像について取り上げている論文は僅かしかない。

初めて朝ドラについての考察を行ったのは牧田（1976）である。牧田は朝の視聴習慣、連続テレビ小説の構造、視聴率と視聴者について分析を行い、貴重な成果を挙げた。続いて、牧田・謝名元（1983）が『おしん』ブームについて調査を行った。近年は、藤宮（1999）が「女性の生き方」という考察視点から、朝ドラのこれまでの流れと、女性主人公の特徴について論じている。さらに、和田（2006）は、朝ドラの一部の作品を例に取り上げ、初めてジェンダーの視点から朝ドラについて考察した。

以上のように、朝ドラに関する分析や調査はあるものの、朝ドラの女性像について、物語の内容に即して詳しくテキスト分析を行ったものはほとんど見られない。そこで筆者の研究¹では朝ドラの女性像の変化を記録するために、80年代から2000年代までの映像分析を行った。従来の研究は概ね量的方法を適用し、いくつかのドラマを比較し、男性と女性の登場する割合を分析している。しかし、筆者はドラマの内容と現実社会における女性の照合を目的として、テキスト分析と登場人物分析を中心とする研究手法をとった。さらに、登場する女性の特徴を

比較し、登場人物の価値構造を分析することにより、それぞれの登場人物の役割と相違を明確化した。

1.2 問題提起～「家庭の女性」という特徴

テキスト分析を通じて、量的分析だけでは読み取れない結果を得た。それは80年代から2000年代までの朝ドラの女性像には、変化が見えるものの、いずれも「家庭的」であるということだ。年代別にテキスト分析の結果をまとめると以下のようになる。

1) 80年代の『濡つくし』（ジェームス三木, 1985）、『純ちゃんの応援歌』（布勢, 1988-1989）：私的空間での活躍

家父長制の制度に縛られるような女性が主として描かれ、娘、妻、母としての側面からの自立が多く描かれている。対比的な脇役の女性により、主人公の従順さが際立ち、父親、もしくは夫の不在により成長していく女性主人公が登場した。

2) 90年代の『ふたりっ子』（大石, 1996-1997）：私的空間から公的空間へ

女性の自立は、家庭、自営業という「私的空間」から「公的空間」へと進出した。その背景として考えられるのは「男女雇用機会均等法」の施行である。社会で活躍する女性主人公の姿が顕著に見えてきたにもかかわらず、物語の設定として、仕事と家庭の二者択一が描かれてしまう。公的空間へ進出する際に女性主人公に与えられる挫折と「破綻」は、両者が両立できない設定となっている。

3) 2000年代の『ちゅらさん』（岡田, 2001）

主人公の恵理は看護師として働いているように、女性の公的空間への進出が目立つ。物語の構造から読み解くと、主人公の職業設定、従来の家族像とは異なる「一風館」の住民の設定は特徴的である。この作品は21世紀の女性の姿を忠実に描いているとはいえ、終盤になると家庭への回帰、つまり既存のジェンダー規範（男は外、女は家）に回収されていく。

以上のように、女性の社会進出や時代の変化に伴い、女性の自立は私的空間から公的空間に移行していくという変化が見られた。しかし、「仕事と家庭の二者択一」や、「家庭への回帰」という設定は、いずれも性別役割分業として、「女性＝家庭」を指向する傾向が読み取れる。

だが、以上の分析には80年代以降の作品しか含まれていない。このような表象の生成の根底にあるものは何か。その成立を確認する必要がある。なぜ朝ドラの女性像は、女性個人と

してよりも、娘、妻、母として描かれる側面が多いのであろうか。「家庭の女性」としての朝ドラのヒロインの表象が作り出された歴史的背景として、朝ドラの成立期（初期）である60、70年代の作品を検証する必要がある。

1.3 朝ドラの時期区分

1961年の初の作品である『娘と私』（山下, 1961-1962）から、81作目の2009年の『ウェルカム』（相良, 2009-2010）まで49年の歴史を歩んできた朝ドラであるが、本稿は前述の理由から朝ドラの成立期に焦点を絞る。

まず、初期の朝ドラと他の時期を区分するため、作品の時期区分を示す。NHKプロデューサー小林由紀子²は、以下の4期の時期区分を提示している（小林2009）。

1) 1作目から14作目『鳩子の海』（林, 1974-1975）まで：明治生まれ、昭和初期生まれの女性が家族とともに戦中、戦後を生き抜く話が大多数。

2) 15作目『水色の時』（石森, 1975）から41作目『純ちゃんの応援歌』まで：家族よりもヒロインが中心となり、女性の社会進出が目覚しかった昭和50年代を反映。

3) 42作目『青春家族』（井沢, 1989）から61作目『あすか』（鈴木, 1999-2000）まで：生き方の多様性、女性の願望のようなものが続く。

4) 62作目『私の青空』（内館, 2000）以降：再び家族、夫婦、自分らしい生き方、等身大の女性が主題となる。

小林が提起した4期の区切りを参考にしつつ、筆者は視聴率と物語の背景の要素を加えて時期区分を提示したい。まず、第1期の1961年から1974年を「成立期」とし、次に、視聴率が40%台前後で、女性ヒロインを中心とする作品の多い1975年から1988年を「全盛期」とする。次に、1989年、42作目の『青春家族』以降、戦争の題材を減らし、視聴率が35%から30%、25%に移行した時期を「移行期」と名付け、そして、2000年に入り、現代女性の生き様を扱うテーマが目立つが、2009年の現在まで、視聴率の低下も顕著になった時期を「変動期」として区分する。

本稿の中心的分析対象となるのは、「成立期」と名づけた初期の朝ドラであり「2 成立期の朝ドラ」では、その成立背景を考察し、3では初期の朝ドラの作品の中で、もっとも人気を博

した1966年の『おはなはん』を取り上げる。その受容状況を見ながら、朝ドラの形式の転換と、女性の表象を検証し、女性が視聴してきた理由を探る。

2 成立期の朝ドラ

2.1 原案—新聞小説とラジオ小説から

朝ドラは1961年、初の作品を放送し、当時としては画期的な挑戦であったと言われた。放送当時の新聞記事は以下のようにその先駆性に注目している。

『娘と私』。もっともこの番組は正確には「連続テレビ小説」と呼ぶことになっていて、この種のものが本式に放送されるのはわが国では初めて [dots added] …。

…

放送時間が朝の8時40分という視聴者の比較的忙しい時間に出るのも、ドラマ風番組としては前例がなく [dots added] …。

…

さる元日から三日までNHK総合テレビに連続三回出た『伊豆の踊子』(川端康成原作)がそのはじめといわれる。名作のテレビドラマ化 [dots added] 『伊豆の踊子』はテレビ小説の可能性をさぐるためのテスト版的な意味を持っていた。(「きょうから「娘と私」 本式放送はわが国で初めて」, 1961, p. 5)

また、NHK文芸部に属した近藤良男は、朝ドラの制作の背景について、こう語っている。

『新聞小説にあやかってラジオ小説が生まれたように、テレビでも同じことやれるはずだ』という提案が、テレビ小説というタイトルにつながった。朝の時間帯に編成されたもの、朝刊の連載小説 [dots added] を意識したからだ。(「TV40年連続テレビ小説「娘と私」の成功」, 1994, p. 9)

当時朝ドラは、斬新なものとして捉えられており、朝の時間帯でドラマ番組を放送するのは前例がなかった。また、60年代は朝からドラマを見るのが想像しにくい時代であった。ゆえに、まずは「名作」のテレビドラマ化で、「朝刊の連載小説」を意識しながら制作をスタートしたという。

この前例のない朝のドラマ放送は1960年代にはどのような意義を持っていたのか。朝ドラが女性を描く物語、つまり、女性を描き、女性が観る番組として成立した経緯を明らかにしたい。

2.2 原型—家族を扱う「ホームドラマ」

朝ドラは新聞小説を当初の制作の背景の一つとしていたが、内容の原型はホームドラマであると、多くの研究(鳥山, 1987; 坂本, 1996; 西野, 1998)が主張している。

ホームドラマ(home drama)は、日本の独特な放送形態と見られているが、その誕生については主に2つの要因が挙げられる。1つ目の要因は、アメリカの番組の影響である。1950年代、テレビの製作技術や番組のノウハウは未熟であった。テレビの普及に追い付かないほど番組の需要があり、一時はアメリカから番組を大量に輸入した。このように日本のテレビの初期放送史から考察すると、アメリカの「シチュエーション・コメディ」と「ソープオペラ」がホームドラマの原型として捉えられる。

2つ目の要因は、映画のジャンルの中での〈ホームドラマ〉³に遡ることができる。坂本佳鶴恵(1996, p. 356)は、ホームドラマは映画の〈ホームドラマ〉を背景として成立し、その中で扱われた母もの、母性愛という題材が家族の物語を成立させたと指摘する。坂本(1996, p. 96)は映像メディアのジャンルにおいて、「家族もの」を最初に扱ったのは映画であり、母性愛をテーマにする「母もの」の日本映画は1920年代のアメリカから輸入されたものがきっかけとなって製作が始まったと指摘した。「家族もの」は母もの・父ものからホームドラマへ、という流れであることも、坂本の分析によって明らかになった。また、〈ホームドラマ〉は女性をターゲットにした映像と考えられ、女性の観客を想定して形成された。

同時代に、同じ家族関係の愛をテーマとした物語であり、かつアメリカから輸入されたもののなかで、「父もの」はあまり日本では定着しなかった。この現象について、日本文化における「母性愛と親子愛」の特別な関係が理由とされている(坂本, 1996, p. 165)。坂本(1996)は、「母もの」の母親像は、従来から「日本的」とされている献身的な母親像とほぼ重なっている(p. 169)と指摘し、さらに坂本は、山村(1978, p. 188)の分析結果を引用して次のように説明している。戦前の国定教科書、戦後の母を扱ったテレビドラマなどの面接調査をデータとして分析した結果、その中に見えた母のあり方という観点からの母親像は、主体的な生身の人間というより、子供との関係で生きる存在へと象徴化されるという(坂本, 1996, p. 169-175)。日本の母親像は軍国の母から始まり、個人の社会的達成の動機付けとして表現されている。「母もの」は、映像の中の母性愛の表現を確立した。坂本が指摘した「母もの」の母親像、軍国の

母というイメージは朝ドラの内容を想起しやすく、朝ドラの中にホームドラマの要素が織り込まれた原因と考えられる。

2.3 朝の時間帯での放送

朝からテレビを見ること自体、朝ドラが制作された1960年頃にはまだ一般的ではなかった。朝からテレビを見るという習慣は、1963年以降、朝のニュース番組が高視聴率を出したことによって、次第に定着していった。では、朝の番組は誰に見せるのか。朝ドラは朝のニュース番組の放送時間後、「視聴者層として家庭婦人を強く意識し」「主婦向けのため」(牧田, 1976, p. 80)に放映されていると言われているが、本稿はこれに疑問を提示しつつ考察してゆく。

3 朝ドラの特徴の分析

まずTable 1-1の14作について[1]視聴率と[2]新聞や雑誌等の記事数を比較し、Figure 1の平均視聴率曲線図とFigure 2の記事数比較の数字を確認する。(Table 1-1と1-2、Appendix Tableを合わせて考察を行うため、Table 1-1からTable 1-3⁴「朝ドラ初期作品リスト・特徴分析表」とAppendixの「週刊TVガイド⁵記事数比較表」を参照願いたい⁶。

Table 1-1 朝ドラ初期作品一覧・記事数リスト

| 年 | 作品名 | [1] 視聴率 | [2] 記事数 週刊TVガイド | 朝日新聞 朝日聞蔵 | 読売新聞 ヨミダス | [3]NHK アーカイブス 現存状態 | DVD・VHS 化 |
|----|-----------|---------|--------------------|--------------|--------------|-----------------------|--------------|
| 61 | 娘と私 | 18 | 0 | 4 | 10 | 最終回 | |
| 62 | あしたの風 | 21 | 0 | 1 | 0 | なし | |
| 63 | あかつき | 24 | 0 | 0 | 0 | 235、239回 | |
| 64 | うず潮 | 30.2 | 5 | 4 | 2 | 309、310回 | |
| 65 | たまゆら | 33.6 | 0 | 4 | 4 | なし | |
| 66 | おはなはん | 45.8 | 53 | 9 | 13 | 1-6回、125から130回 | ● |
| 67 | 旅路 | 45.8 | 21 | 3 | 14 | 2、29、最終回 | |
| 68 | あしたこそ | 44.9 | 23 | 4 | 9 | 315回 | |
| 69 | 信子とおばあちゃん | 37.8 | 23 | 1 | 6 | なし | |
| 70 | 虹 | 37.9 | 35 | 2 | 6 | なし | |
| 71 | 鶴子ひとり | 47.4 | 54 | 4 | 6 | なし | |
| 72 | 藍より青く | 47.3 | 23 | 4 | 10 | なし | |
| 73 | 北の家族 | 46.1 | 41 | 4 | 8 | 1、226、301、308話 | |
| 74 | 鳩子の海 | 47.2 | 41 | 7 | 7 | トータル20話 | |

Note 1. 1962 - 1974 放送当時の記事数。

Note 2. ●は一致する項目。

Note 3. 『鳩子の海』は1、6、35、59、63、64、67、73、75、77、79、105、188、226、237、246、271、295、297、304話、トータル20話がNHKアーカイブスに現存している。

Note 4. [2] 記事数については、朝日新聞は「聞蔵 デジタルニュースアーカイブ・フォーライブラリー」の、読売新聞は「ヨミダス歴史館サービス」の情報から得たもの。

[1] 視聴率

1961年から1965年まで、視聴率が徐々に上昇する傾向が見られ、1966年の『おはなはん』になると、一気に45.8%にも上った。1966年以降の作品は45%台を維持し、また一旦下がり、1971年以降の作品はほぼ45%以上の視聴率を記録した。

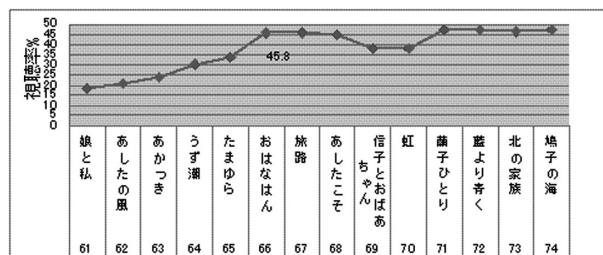


Figure 1. 平均視聴率曲線図

[2] 記事数（新聞と週刊誌）

次に、朝ドラの放送開始とほぼ同時期に創刊された『週刊TVガイド』の記事数を考察する。Figure 2を見ると、1965年までの作品の記事数が一桁台であるのに対し、1966年の『おはなはん』の記事数は、一躍53件となった。記事数の最も多いのが、1971年の『繭子ひとり』（高橋、1971-1972）の54件であり、全体的に1966年以降増加していく傾向が見える。また、朝日新聞、読売新聞の記事については、すべて一致しているわけではないが、1966年以降の記事数が増え、1966年の『おはなはん』の記事数をもっとも多くなる。以上、初期の朝ドラの作品において、1966年の作品が視聴率も高く、報道された頻度も極めて多いということがわかる。

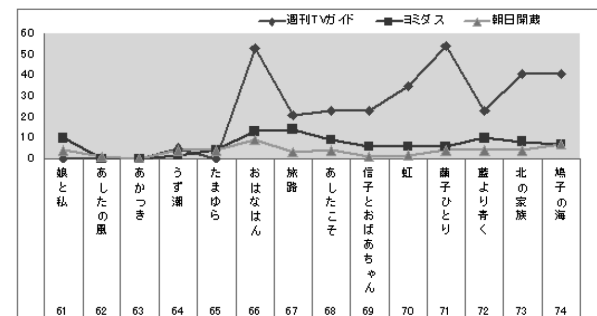


Figure 2. 記事数

[3] 本稿の映像資料としては、NHK アーカイブス⁷とNHK エンタープライズのDVD (VHS) を利用した。分析するコンテンツは、必然的にこれらの資料が入手可能という条件を満たすものとなる。現存している作品の中で、1966年の『おはなはん』はVHSの総集編が出ており、1974年の『鳩子の海』はアーカイブスでの保存状態が最もよい作品である。

Table 1-2 朝ドラ作品の形式特徴

| 年 | 作品 | [4]原作 | [4]脚本 | [5]有名な作家によるもの | [6]オリジナル | [7]フィクション・ノンフィクション |
|----|-----------|--------|---------|---------------|----------|--------------------|
| 61 | 娘と私 | 獅子文六 | 山下与志一 | ◆ | | ◎ |
| 62 | あしたの風 | 壺井栄 | 山下与志一 | ◆ | | ◎ |
| 63 | あかつき | 武者小路実篤 | 山下与志一 | ◆ | | ● |
| 64 | うず潮 | 林芙美子 | 田中澄江 | ◆ | | ◎ |
| 65 | たまゆら | 川端康成 | 山田豊、尾崎南 | ◆ | | ● |
| 66 | おはなはん | 林謙一 | 小野田勇 | | | ◎ |
| 67 | 旅路 | — | 平岩弓枝 | | ◎ | ● |
| 68 | あしたこそ | 森村桂 | 橋田寿賀子 | | | ● |
| 69 | 信子とおばあちゃん | 獅子文六 | 井手俊郎 | ◆ | | ● |
| 70 | 虹 | — | 田中澄江 | | ◎ | ● |
| 71 | 蘭子ひとり | 三浦哲郎 | 高橋玄洋 | | | ● |
| 72 | 藍より青く | — | 山田太一 | | ◎ | ● |
| 73 | 北の家族 | — | 楠田芳子 | | ◎ | ● |
| 74 | 鳩子の海 | — | 林秀彦 | | ◎ | ● |

Note 1. [7] の列において、フィクションは●ノンフィクションは◎。

Note 2. ◆、●、◎は一致する項目。

Note 3. Table 1-2 は牧田徹雄「NHK連続テレビ小説の考察」の表2の一部を参考にして作成したもの。

[4] 原作と脚本：Table 1-2 に載せてあるように、朝ドラは原作のある小説を扱い、テレビドラマ化した点が一つの特徴と言えよう。特に初期の作品の前半、1965年『たまゆら』(山田, 1965-1966)までの作品は[5]有名な作家による作品が集中した。1966年以降の作品はというと、必ずしも小説をベースに制作したものではなく[6]オリジナル作品と[7]フィクションという2つの特徴を合わせ持っている。

以上のような要素と特徴を持つ朝ドラであるが、ここでは要素の[4]から[7]までの特徴を見ながら、その形式を確認する。

3.1 文学性を盛り込む作品(1961 - 1965年)

朝ドラの扱う内容として、最初の作品『娘と私』などの初期作品に、獅子文六、壺井栄、武者小路、林芙美子、川端康成などの作家によるいわゆる名作をドラマ化したものが多い。この特徴は、朝ドラの成立背景と深く関連していると考えられる。『娘と私』を企画した岩崎修氏によると、朝ドラの母体として2つのものがあげられる。ひとつは、1959年に放送された初の連続テレビドラマ『バス通り裏』(筒井&須藤, 1958-1963)であり、もうひとつは1961年の正月に3日間連続で放送された『伊豆の踊子』(篠崎, 1961)である(岩崎, 1962, p. 53-57)。

『伊豆の踊子』という作品はテレビ小説としてはじめて試みられた形であると言われ(岩崎, 1962; 牧田, 1976)、このドラマは「主人公の心理の独白もいかにして、心理描写の密度もやや文学的な厚みを狙うというのが制作者の意図であった」(牧田, 1976, p. 85)という。

また、「この作品ではナレーションが中心になるため原作の味を忠実に生かしていると、内外から好評を得た」(『週刊TVガイド』, 1968a, p. 42)という。この作品の成功が朝ドラの制作のきっかけとなった。しかし、成立当初の「テレビ小説」の制作方向はまだ完成しておらず、作品の路線について、制作側の丹羽一雄氏によると、「テレビ小説とは一体何であるのかということをよく聞かれますが、... なかなか定義などというものは出てこない」「ただ言えることは、要するに小説、文学といったものとテレビドラマを結合させ」(牧田, 1976, p. 85)たのだそう。

テレビ小説という形式の番組は、前述したように、新たな形式のドラマであった。牧田によると「文学性のあるナレーションと、テレビの映像という異質のものをかさねあわせることによって、新しい表現を生み出すという意図で出発した連続テレビ小説シリーズは、その初期において、獅子文六・壺井栄・林芙美子など高名な作家の自伝小説を題材としてえらんでいる」(牧田, 1976, p. 78)という。

牧田の研究が明確に指摘したのは「テレビドラマに文学性を盛り込むという意図で始められた『テレビ小説』の題材として、まず、高名な作家の原作ものが選ばれたというのは、ある意味では当然のことであった」ということであり、さらに、牧田はその原作とナレーションの文学性を指摘した。

これらの作品の現存しているわずかな部分を、NHKアーカイブスにて考察した。原作の小説と合わせて、物語のあらすじは読めるものの、残念ながら、ナレーションの文学性という特徴の確認は困難であった。

初の作品『娘と私』の放送表現については、語りが中心となっており、原文の朗読を盛り込んで、ナレーションの表現は「小説を語りとタレントのセリフでつないで」「原文の朗読、波や雨風の音、音楽、といった音を中心にしながら背景になる画面を展開する」（「きょうから娘と私」本式放送はわが国で初めて, 1961, p. 5）という「文学的」なものであった。

名作のドラマ化という路線から出発し、初期の朝ドラは文学性を盛り込んだ作品を取り上げる傾向が見られた。この特徴は80年代、90年代以降周知された朝ドラの形式とはだいぶ異なるようである。女の一代記や主人公とその家庭を中心に扱う物語として知られている朝ドラの形式と内容の転換に注目しながら分析する必要がある。

1966年の作品『おはなはん』は前述したように、高視聴率をマークし、記事数も極めて多い。牧田によるとそのヒットは、下記のいくつかの点から分析できるとする。

(1) NHKによって連続ドラマ化される前に1962年に単発ドラマとして一度ドラマ化し人気を博した。

(2) 『おはなはん』は前作と異なり、ナレーションがそれまでの一人称から三人称に変化し、さらに小説の朗読ではなくより平易で、牧田によると「テレビを使った語り物という方向へ確信をもって変えた」（牧田, 1976, p. 88）という。

形式の変化について指摘した牧田であるが、ここでは「女性主人公」と「視聴者」との関係に着目し分析していく。

3.2 形式の転換—『おはなはん』の人気と「女の一代記」の成立(1966年)

東京都の水道局員が、ある日、NHKにこう伝えてきた。

「朝8時15分になると、水量メーターが急に下がり、水の出が良くなります」

「全国の主婦が、8時15分になると一斉に職場を放棄？」

（「いやア 参った参ったこの騒ぎ 空前！！おはなはんブームの総決算」, 1967, p. 24-28)

これは66年の朝ドラ『おはなはん』が放送された時の報道である。『おはなはん』という作品の受容状況について、週刊誌の記事からその人気ぶりを覗いてみる。

3.2.1 『おはなはん』雑誌分析—『週刊TVガイド』から

1) 見出し⁸

(1) 「甞った信長 高橋幸治 NHK「おはなはん」で、こんどは軍人役 拝見 [写真特集一面 4ページ]」(1966, p. 7-10)

(2) 「平凡な女、はなの一代記 榎山文枝、高橋幸治らが出演 [番組紹介]」(1966, p. 92)

(3) 「高橋幸治に再度の助命嘆願」(1966, p. 12)

(4) 「テレビでも結婚シーズン 榎山文枝が花嫁に」(1966, p. 14)

(5) 「かわいいですのう 「おはなはん」で人気沸騰 榎山文枝の熱演ぶり拝見」(1966, p. 3-5 [写真特集一面])

(6) 「おはなはんに娘誕生 榎山文枝にそっくり」(1966, p. 12)

(7) 「おはなはんがレコード化 倍賞千恵子の歌、裏はテーマ音楽」(1966, p. 26)

(8) 「後家入りにきんざらんかい 老若男女がみんな惚れたおはなはんの魅力とは？」(1966, p. 32-35)

(9) 「快調のペース おはなはんは陽気な後家はん 朝の人気者・榎山文枝」(1966, p. 3-5 [写真特集一面 3ページ])

(10) 「横顔紹介『おはなはん』をとりまく人々」(1966, p. 28-32)

(11) 「スタジオ訪問 おはなはん」(1966, p. 24-27)

(12) 「テレビこの1年 なんでもベストテン 強い「おはなはん」と「てなもんや三度笠」」(1966, p. 28)

(13) 「『おはなはん』から宇宙中継まで=66年テレビ界十大ニュース=」(1966, p. 26-28)

(14) 「あの顔、あのシーン 思い出のおはなはん大特集」(1967, p. 3-9)

(15) 「いやア 参った参ったこの騒ぎ 空前！！おはなはんブームの総決算」(1967, p. 24-28)

(16) 「特集 さよなら「おはなはん」 生かすか殺すかの大論争！」(1967, p. 34-38)

2) 表紙

- (1) (1966a, cover page)
- (2) (1966b, cover page)
- (3) (1967a, cover page)
- (4) (1967b, cover page)

3) 読者サロン

- (1) 「おはなはんの楽しさ」(1966, p. 112)
- (2) 「「おはなはん」と母」(1966, p. 104)
- (3) 「おはなはんを見終わって」(1967, p. 104)

4) 紹介記事

- (1) 「『おはなはん』の人気のすばらしい。関東では、先週集計分が50%を越えた。…要するに、実話をもとにした個人的伝記、それも、婦人層が圧倒的なこの時間帯で、女の伝記こそ、もっとも大衆的だ。」(「かわいいですのう 「おはなはん」で人気沸騰 榎山文枝の熱演ぶり拝見」, 1966, p. 3-5)
- (2) 「特別企画：本誌記者座談会 「おはなはん」最高の人気」：「『おはなはん』の気持は、本のよさ、脇役のうまさにもあるな」、「とにかく、奥さまたちは”女の一生”[sic]がお好きなんだよ。それがうける要素。」(1966, p. 26-28)
- (3) 「庶民の教科書」：「おはなはんは、明るくて、強く、大らかで、情にあつい。『期待される人間像』なのである。速水夫婦は『期待される夫婦像』である」(「後家入りにきんさんかい 老若男女がみんな惚れたおはなはんの魅力とは？」, 1966, p. 35)

以上は雑誌の内容から抜粋したものである。紹介記事の内容を確認したところ、2つの現象が確認できる。1つは『おはなはん』という番組が放送された当時の人気の高さ、その人気のもととなったのは視聴者のよき反響と考えられる。

その内容を読んでいくと、例えば4)の(1)：「婦人層が圧倒的にこの時間帯で…」、4)の(2)：「奥さまたちは女の一生がお好きなんだよ。」と、1)の(15)：「朝8時15分になると、水量メーターが急に下がり、水の出が良くなります」「全国の主婦が、8時15分になると一斉に職場を放棄?」。これらの記事から1つの傾向が読み取れる。つまりこの作品は主婦層から絶大な人気を得たということが分かる。

次に、4)の(1)から『おはなはん』の人気のすばらしい。関東では、先週集計分が50%を越えた。」という記事に、番組の高視聴率を言及した。さらにその話題性の高さについて、1)の(6)に「おはなはんに娘誕生 榎山文枝にそっくり」という記事もある。主演の榎山文枝とそっくりのおはなはん人形まで発売されたことから考えれば、実に珍しい例であった。また、1)の(13)に年末の特集に載せられた「『おはなはん』から宇宙中継まで=66年テレビ界十大ニュース=」というテレビ界の十大ニュースとしても取り上げられた。

では、この作品の魅力はどこにあるかを、映像の考察を加えて見ていく。

3.2.2 『おはなはん』映像分析

3.2.2の部分において、初期の朝ドラの作品の中で、唯一総集編VHSビデオカセット集が出版された『おはなはん』の作品を考察した結果をセリフ記録として取り上げたい。セリフの読みによって、この作品の内容と主人公のイメージを確認する。

セリフ記録

場面1 00:06:10 - 00:07:00

はなの卒業式、一人の女子学生の結婚について語り合うおはなはんと友人

はな：みんな早いやね。お免許をもらって、はかまをぬいたら、すぐお嫁さんになるんやね。

友人1：当たり前やないか。うちらも18やもん。

はな：どうやろうか。けど、すぐにお嫁に行くのがつまらないような気がするわ。

友人2：おはなはんは、先生の目を盗んで、小説本を読んかったけん。恋愛に憧れとるじゃろう。

友人3：わからんよ。おはなはんじゃけん。こんなそぼげな顔をして、実は、大洲のうちに帰ると、もうちゃんと決まるとるなん人。

はな：はあ、決まるとるよ。

場面2 00:14:15

木をのぼって、お見合いの相手を見る。お見合い相手が来ると聞いて、好奇心に富むはなは急いで顔を見ようと、木の上まで登った。縁談を断りに来た、お見合いの相手は速水謙太郎という軍人である。はなはこの人に一目惚れし、いったん破局した縁談ははなの行動によって、結婚にまで至った。

場面 3 00:57:25

謙太郎がドイツの駐在武官として栄転する前、連隊の大演習を立派に成し遂げるため、連日の疲れが出て、食事するシーン。謙太郎は床で横になって、はなはその様子を見て、

はな：あなた。熱いですよ。少しお熱があるんじゃないありませんか？

謙太郎：うん、そうか？

はな：風邪かしら。

謙太郎：そうかもしれない。連隊の俺の部屋は夜になると、ずいぶん冷え込むからな。

はな：お薬を持ってきましょう。

謙太郎：あ、いいんだ。これを飲んで寝たら、風邪なんかすぐ治る。

はなは謙太郎の熱に気付いたが、謙太郎は「大丈夫」と言い張り、はなが医者を呼ぶと言っても、謙太郎は自分の体に自信を持っているせいか、薬も医者も一切拒否した。

場面 4 00:59:00

二日間が過ぎても、熱が下がらない謙太郎。仕事に出かけるシーン。

謙太郎は立って、装備を身に付け、はなは手伝う。

はな：あなた、まだ熱がひかないじゃないありませんか？

謙太郎：あ、何でもない、大丈夫だ。

はな：本当に大丈夫ですか？

謙太郎：ああ。俺は日露戦争の激戦の勇士だぞ。風邪なんかうまくぶっ飛ばして、ひと汗ながせばぶっとんじまう。

はな：でも。

謙太郎：責任ある一行中隊の指揮官は風邪くらいで休めると思うか。まして俺にとってはこの連隊の最後のご奉公だ。つまらん心配するな。

はな：はい。

何回も旦那の体調を心配していたが、謙一郎の言葉で止められた。その後、謙太郎が軍隊に戻ってから、肺炎で急死してしまったという不幸に至った。

場面 5 01:16:00

軍隊に行き、謙太郎の遺体を見て自分を責めるはな。(カメラがはなの顔にクローズアップした)

ナレーション：おはなはなは、芹川中尉の話聞きながら、臍をかむ思いであった。なぜあの朝、自分は夫を止めなかったのだろう。ただの風邪を考えたのが間違いだった。もしも本当の病症を掴んでいたら、どんなに夫が言い張ろうと、どんなに夫に叱られようと、馬の轡にすがり、あぶみに腕をちぎられても、止めたのであろう。おはなはなは、自分に医学の知識がなかったことが、死ぬほど悔やまれるのだった。

場面 6 00:24:15

大洲の実家に帰り、生計のことで悩むおはなはなの一家。

正太：へえ？姉さんが医者になんか？本気がいの？

はな：本気よ。

おば：へえ、女のお医者さんね。

正太：相変わらず突飛なことを考えるんじゃないの。おねえさん。

はな：突飛じゃないわよ。

母：いいえ。正太のいう通りじゃ。突飛玉ね。そんな急に思いついたらしようって。

はな：急に思いついたらじゃないのよ、お母さん。

これはね、速水が死んだ時からずっと考えていたことなんよ。

母：そんなに前から？

父：どういうことなんじゃ。訳を言うてみ。

はな：1年の計は元旦にあるっていうこともあるし、ちょうど家族も揃ってとるけん。そうしたら聞いてもらいます。...

はな：うちが医学に知識がなかったけん。速水を殺したんです。

母：そうけんなこと。

はな：いいえ。だからね、子供たちだけは、二の前をさせたくないです。子供たちだけは、自分の手で守ってやりたいのです。ほんじゃけん。お父さん、お母さん。うちにお医者さんの勉強をさせてください。...

母：お父さん、なんとか言うててくださいよ。

父：女の医者学校ってちゅうのは、どこにあるんじゃない。

おば：ええ、聞きませんな。

はな：東京です。
母に反対されたが、おはなは強い決意をした。子供の謙一郎と弘枝を実家の母に預けて、東京の女医学校へ通うことにした。

場面 7 00:41:40

母の死の責任をはなのせいだと言い出す親戚の伯父さんと会話するシーン

親戚：疲れはったのじゃろう。あの年になってからに、子供二人の面倒を見て、大変じゃろうな。

はな（無言）

親戚：これは、つまらんことを言ってしまう。おはな、気にしないや。

はな（頷く）

親戚：あんな、どうこういわけじゃないけん。あんただって、東京に遊びに行っているわけじゃないけん。...

はな（泣きそうになった）

父：いや、それが原因ちゅうわけじゃないじゃ。寿命じゃ、寿命。

正太：姉さん、つまらんこと、気にしないでいいんだぞ。

場面 8 00:46:20

子供を見てくれる母が亡くなり、学校と子供はどうするのか、父から聞いてきたシーン。

父：おはな、おまえこれからどうなんする気じゃ？ ...

父：そりゃ、まあ、せっかく入った学校じゃ、子供たちの面倒を見てくれている人さえおりゃ、俺は、続けさせてやりたい、山々じゃの。うちおいては、どうにも発展にならん。...

はな：お父さん、おばさん、すみません、いろいろ。でもご心配なく。私の決心はもうついておりますから。

はな：諦めました。学校。

弟の正太が猛反対。

はな：医者になろうと思ったのも、元はと言えば、子供たちを無事で、まっすぐに育てたいと思ってからです。けど正直にいうと、お医者さんの学校に入ってみたら、また別の目的も、別の欲望も出てきました。でも、肝心な子供たちが不幸せになってしまえば、何もなりませんもんね。

結局、子供を育てながら、東京で勉強することにした。昼間は子供を細倉夫婦に預けて、夜は自分が子供の世話をする。

場面 9 00:45:00

三雲からのプロポーズ

ナレーション：おはなは迷っていた。三雲が嫌いでないのが事実だ。好きだからこそ、甘えて勉強に押し掛けたりしたのである。夫の死後、我武者らにここまで来たものの、これからまだ先の道は遠く、海のものとも、山のものとも知れないのだ。三雲の家にはそのままとけ込んでしまいたいような、家庭の安らぎがある。おはなはは大いに迷っていた。

場面 10 00:46:01

子供を考え、再婚をあきらめたおはなはな

はな：あのね、謙ちゃん、三雲のおじさんは、嫌い？

謙一郎（頷く）

はな：どうして？あんなにやさしいし、いつも謙ちゃんと遊んでくれるじゃない。

謙一郎：どうしても大嫌い！

その後、謙一郎が急病で入院となり、一ヶ月し、いよいよ退院した謙一郎。

場面 11 01:00:04

謙一郎とはなの会話

はな：よく頑張ったわね、謙ちゃん。辛かったでしょう。

謙一郎：でも、お母ちゃんとずっと一緒だったからよかった。

はな：まあ。

謙一郎：お母ちゃん、まだ学校に行くの？

はな：いいえ、ずっとうちにいますよ。謙ちゃんがすっかりよくなるまでね。

謙一郎：じゃ、なかなかよくなるぞ。

謙一郎：謙ちゃんったら

寝ていても、「お母ちゃん行かないで」寝言をいう謙一郎であった。子供の気持ちを考え、おはなはんは母として生きていく決意をした。

場面 12 01:06:52

三雲の求婚を断ったシーン

三雲先生：理由を聞かせてくれないか？

はな：私は、私の一生を、子供のために使うことにしました。

三雲先生：自分の幸せは？女としての幸せを捨てる気か？

はな：はい。私の再婚で、もし子供たちが不幸せになったら、それは私にとっても、大きな不幸なのです。

三雲先生：ばくに子供を任すことができないということですね。

はな：どうしてなのでしょう。あまり人見知りのしない謙一郎が、先生にだけがなかなかつこうとしません。私の態度に先生を、好きだという気持ちがあるのは、あの子には見えるかもしれません。先生から結婚の話を伺ったとき、私とても嬉しゅうでございました。ありがたいと思いました。それで、そのために、少し有頂天になったようです。その時、謙一郎があ病気です。私が、天罰じゃ、と思いました。

三雲先生：天罰！？...

はな：いくら学業のためとはいえ、なぜ子供たちを、人任せにしといたんだろう。母親は、どんな事情があろうと、子供から離れてはいけません。

ここでの記録は、主に(1)主人公の性格と(2)人生の転換点を中心に注目した。場面1と2の記録から、主人公はなの性格が読み取れる。少しおてんばであるが、陽気で見合い結婚の時代でも恋愛に憧れている女性として描かれている。結婚して5年目、場面3から5の部分は、はなが夫の死に直面したシーンである。夫の謙太郎が肺炎で亡くなり、その死を自分のせいにしたはなの姿が見られる。場面6では、「うちが医学に知識がなかったけん。速水を殺したんです。」「子供たちだけは、自分の手で守ってやりたいのです。」とまで言い出したはなは、子供を守るために、女医学校に通うことにした。一旦子供を実家の母に預け、東京で女子学生として生活をしたが、やがて母の急死で学校を諦めようとした(場面7と8)。しかし、友人の助けによって、学校と子育ての両方を行うという生活を一時期過ごした。はなの学校の先生である、医者三雲先生とはなはお互いに好意を寄せているが、三雲先生からプロポーズされたはなは(場面9)、子供の気持ちを考え1人の女として生きていくより、母としての道を選ぶ

ことにした(場面10と11)。三雲のプロポーズを断った理由は子供の病気で、自分は母親として失格だと感じたはなは、子供より自分の恋のことを先に考えたこと天罰だと言い出した(場面12)。「謙一郎があ病気です。私が、天罰じゃ、と思いました。」「私は、私の一生を、子供のために使うことにしました」と、はなは結婚を選ばずに、子供のために生きていくことを決め、頑張ってきた女医学校もやめ、産婆を職業に子供を女手一つで育てた。

ここで見てきたおはなはんの人生の転換点に注目してほしい。女医学校に通うのは夫の謙太郎の死から受けたショックや悔やみと子供を守りたいという願望からであるという設定である。しかし、女医学校を辞めたのも、再婚を諦めたのも、子供のためである。人生のすべてを妻として、母として、夫と子供に捧げる。このような女性の表象が当時の視聴者の共感をえた。

このような設定は、60年代の女性たちの人気を博した。その人気の高まりが、この作品を初期の朝ドラの代表作にしたと言っても過言ではない。『おはなはん』という作品は朝ドラの「女の一代記」の路線を確立し、以降の朝ドラのパラダイムを構築したと考えられる。

『おはなはん』の形式が『テレビ小説』を確立していく方向とすれば、初期の目標とはかなりずれたことになる(牧田, 1976, p. 88)と言われるように、1966年の作品から形式の転換が明確になった。尾崎(1966)、牧田(1976)の指摘によると、ナレーションがそれまでの一人称から三人称に変化し、大衆娯楽の形式に近づいてきた。さらに、本稿でもっとも強調したい点は、「一代記」の成立とその原因である。雑誌記事の内容分析から見たように、この作品は話題となり、特に女性、朝の時間帯に在宅する婦人層からの支持が大きかった。視聴者からの反響の大きさは朝ドラの形式転換に深くつながり、さらにこの形式が66年以降の番組の規範となった理由ともいえよう。

Table 1-3 朝ドラ初期作品内容分析特徴

| 年 | 作品名 | [8]一代記 | [9]家族もの | [10]テーマ | [11]テーマ |
|----|-----------|--------|---------|---------|---------|
| 61 | 娘と私 | | ● | | |
| 62 | あしたの風 | | ● | | |
| 63 | あかつき | | ● | | |
| 64 | うず潮 | ◎女 | | | |
| 65 | たまゆら | | ● | | |
| 66 | おはなはん | ◎女 | | 戦争 | 夫不在 |
| 67 | 旅路 | ◎男 | | | |
| 68 | あしたこそ | | ● | | 父不在 |
| 69 | 信子とおばあちゃん | | ● | | |
| 70 | 虹 | ◎女 | | 戦争 | |
| 71 | 筒子ひとり | ◎女 | | | 母探し |
| 72 | 藍より青く | ◎女 | | 戦争 | 夫不在 |
| 73 | 北の家族 | | ● | | 父不在 |
| 74 | 鳩子の海 | ◎女 | | 戦争 | 母探し |

3.3 「一代記」と家族もの

ここで、牧田(1976)の研究成果を一部参照しながら、朝ドラの扱う題材の特徴について考えてみたい。Table 1-3の中で[8]一代記と[9]家族ものという特徴に注目して考察する。

初期の朝ドラの主要テーマは「家族もの」と「一代記」という2つのタイプに分けられる。家族ものとは、「親と子・夫と妻など、身近な人間関係の中で家族・家庭のあり方を描くもの」と牧田(1976, p. 86)が指摘し、さらに一代記は女性を主人公として、その一生、半生を描くものとしている。両者はともに家族を中心に描く点では変わらないが、一代記の特徴としては、波乱に満ちた人生を生き抜く女性に焦点を当てる傾向がある。

家族ものと並び2つの柱となっている一代記という形式の作品が66年以降に集中している。この特徴の要因となっているのは、前述した『おはなはん』が「女の一代記」のパラダイムとして確立されたことであると考えられる。

1961年から1974年までの作品の中で家族ものは7作、一代記は7作(うち1作は男性一代記)である。Table 1-3で列挙されたように、1961年から家族もの、1964年、1966年と1967年の3作が一代記に変化し、1968年以降また家族ものと一代記、2つのテーマの交代が見える。一代記の例を3.2の『おはなはん』で確認したが、家族ものの例を以下、記事分析で説明する。

62年『あしたの風』(山下, 1962-1963)、63年『あかつき』(山下, 1963-1964)といった「家族もの」に描かれている家族は理想的かつ中流家族が多く、視聴者の共感を呼びやすいものとして位置づけられる。

家族ものに属する62年の『あしたの風』は映像が現存しないため、雑誌の『週間TVガイド』に掲載されたものから検証する。作品の視聴者層については、「一年間つづいた獅子文六の『娘と私』のあとをうけて登場したNHK連続テレビ小説、壺井栄の『あしたの風』は地味な作風だし、... テーマが身近な問題のせい、家庭の婦人層にひろく迎えられている。」(『週刊TVガイド』, 1962b, p. 26)と書かれている。

次の読者の投書に視聴者の反響が見える。

回を重ねる度に一層親しみを覚え、朝、昼の二回見ております。」「子供への愛情、教育について、母親はどうしたらよいかを『あしたの風』の中から、学び取りたいと思います。(『週刊TVガイド』, 1962c, p. 41-43)

63年に放送された『あかつき』は武者小路実篤の作品が初めてドラマ化されたことで、注目を集めたようだ。雑誌の番組紹介の特集では、「善意とまごころをテーマに理想主義の中の

幸福な家庭はどんな環境の中でどのように創り出されるか」(『週刊TVガイド』, 1963a, p. 43)、『『暁』と『幸福な家族』を中心に「愛情と信頼にみちたこの温かい家庭を舞台に」(『週刊TVガイド』, 1962a, p. 20)とある。さらに、その家族の形について「この番組の『佐田家』は中流家庭の理想的な形として描いています。物語前半のヤマ場である長女の結婚式、ぜったいにウソのない、つまり佐田家の経済事情に合ったものを再現したかったのです」(『週刊TVガイド』, 1963b, p. 21)と番組担当一人が証言した取材内容が残されていた。

以上の雑誌記事から、朝ドラの家族ものは家族を中心に扱い、視聴者にとって馴染みややすい題材として見られてきたことがわかる。一代記という路線が成立した後も、しばしば朝ドラのテーマとなっており、初期の朝ドラのもう一つの柱とも言えよう。

3.4 共通の特徴—戦時の女性の強さ(母もの)と父・夫の不在

続いて、Table 1-3の要素[10]と[11]に注目する。初期作品を考察したところ、1966年以降の作品に集中している2つの共通点が見える。1つは「父、夫の不在」と、しばしばメーンテーマとなっている「戦時の女性の強さ」である。

松平(2003)は60年代以降のホームドラマの内容の一つの大きな特徴として、「母もの」といわれるドラマの性質があるという。さらに、「このジャンルのドラマは戦前から存在し、「日本女性の伝統的な忍従と献身の美德が、通俗的な描写で繰り返し描き出されてきた」(松平, 2003, p. 30)と指摘される。

この特徴について、朝ドラと照らし合わせ見ていきたい。Table 1-3からわかるように、1966年『おはなはん』、1970年『虹』(田中, 1970-1971)、1972『藍より青く』(山田, 1972-1973)は、戦時の女性を取り上げ女性の強さを強調する部分が大きい。まさに映画の中にあるジャンル、〈ホームドラマ〉の特徴と一致すると考えられる。2.2に述べたように、映画の〈ホームドラマ〉は母もの、母性愛を扱う題材として、家族の物語として成立した。朝ドラは〈ホームドラマ〉とホームドラマの特徴を受継ぎ、初期以降の朝ドラの作品においても、よく取り上げられる題材として存在しているといえる。

Table 1-3に列挙したように、初期の朝ドラの物語素材のテーマとして、「戦争」と「死」という2つの要素が織り込まれている。その死というテーマはつまり、父の死、夫の死である。1968年の『あしたこそ』(橋田, 1968-1969)では、番組が始まって早々、摂子は父、豊一郎の急死に直面する。そのため大学を中退せざるを得なくなり、生活のためにアルバイトを始めた(『週刊TVガイド』, 1968b, June-July)。また、1972年の『藍より青く』は戦争を背景とした女の一代記である。主人公の真紀は18歳で結婚し、夫の戦死で幼児を抱えて未亡人となっ

た。次に、1973年の『北の家族』（楠田，1973-1974）では、父役の辰造が物語の後半に死んでしまう。

成島（1990）はこの特徴について、60年代後半から70年代にかけて、ホームドラマの中に「欠損家族」という特徴があることを指摘した。TBSの制作した『ありがとう』『肝っ玉かあさん』などの作品において共通している「父親の不在の家庭の中心となってきりまわす母親の存在感」（成島，1990，p. 49）というものは、日本の心情ドラマであると主張した。父、夫の不在という特徴は、朝ドラの80年代、90年代の作品においても、1985年『滞つくし』での夫の不在（失踪）と1988年『純ちゃんの応援歌』での父親の早死、1996年『ふたりっ子』の父の不在（家出）といった例が挙げられる。

朝ドラの2つの特徴は、映画の（ホームドラマ）のジャンルと、60年代以降70年代にかけて、テレビドラマとして人気を博したジャンル—ホームドラマを受継ぎ、さらに父、夫の不在という特徴は1966年以降の作品に集中して見え、ホームドラマには不可欠な要素として存在していると考えられる。

以上、[1]から[11]の要素を分析してきた。分析の結果

- (1) 初期の朝ドラは文学作品から出発し、1966年の『おはなはん』の人気によって、「女の一代記」という方向転換をした。
 - (2) 制作が方向転換したきっかけは、女性から大きな支持を得たことだと指摘できる。
 - (3) 『おはなはん』に見えた女性ヒロインが1つのパラダイムとなっている。
 - (4) 朝ドラの内容として、「家族もの」と「一代記」が両柱となっている。
 - (5) 「父の不在」、「戦時の女性」という特徴を持つ作品は特に1966年以降の作品に集中し、ホームドラマの特性と一致していると考えられる。
- といった特徴が確認できた。

4 初期の朝ドラの成立と成功

3.2の考察に基づき、路線の転向した作品となった『おはなはん』の内容と人気の高さを確認した。初期の朝ドラは1961年の『娘と私』からスタートし、形式の摸索期を経て、「女の一代記」という路線を確立することによって、一躍人気番組となった。ここでは、朝ドラの形成と人気の根底にある主婦という視聴者の存在と番組の関係を考えていきたい。

4.1 朝ドラと主婦の関係—社会背景と女性の主婦化

朝ドラという番組の成立は、朝の時間帯に番組を見る「主婦」に深く関連している。制作側が名作のドラマ化を番組の制作目標として掲げ文学性を含む作品から出発したのに対し、女性の視聴者をターゲットにした意図は明確にはなかった。

最初の制作はあくまでも新たな挑戦としてスタートした朝ドラであるが、その視聴者層については、朝の時間帯に在宅する視聴可能な方に向けて作られたと考えられる。1961年の新聞記事によると、

テレビドラマといえば、もっぱら夜のものと考えられてきた。ところがフジテレビが午後の時間に主婦向けドラマを始めて、これまでの常識を打ち破った。こんどの『娘と私』はさらに朝でもこの種の番組が可能だということを実証する使命ももっている。（「きょうから「娘と私」 本式放送はわが国で初めて」、1961，p. 5）

とある。朝ドラが制作されはじめた当時、ドラマは夜見るものとして認識されていた。ドラマの放送として、朝という新たな時間帯を開拓したと言える朝ドラである。その形式と題材は、1966年の作品を区切りに変化し、それ以降の作品にも影響を与えたが、この変化の背景にあるのは、視聴者、つまり「家庭婦人」、朝の時間帯に在宅する主婦の存在が大きいと考えられる。「主婦の視聴」という想定が当初から制作側にあったものの、番組の成立と形成に伴い、主婦は積極的な受け手となり、主婦の視聴が次第に定型していく。

初期の朝ドラの視聴者であり、本稿で扱うのは、主に戦後の家族体制において大量に誕生した「現代主婦」である。主婦の誕生について、落合（1994，p. 42-43）は、産業化に伴い、第一次大戦後に「大正期のおくさん」が登場したと指摘する。さらに、瀬地山（1996）は主婦を「近代主婦」と「現代主婦」に分類し、再生産労働だけに専念した「近代主婦」は「恵まれた存在であり、一部の女性のみ許された地位だった」とする。それに対し、「現代主婦」は戦後に大量に現われ、「再生産労働だけで1日が飽和しないだけの時間的余裕をもつようになった主婦」、したがって、専業と兼業主婦の両方を含むことになるという意見もある（横山，2002，p. 90）。

このような「現代主婦」の誕生の背景は、高度経済成長期に適合する家族の形態—「性別役割分業家族」である。性別役割分業家族はつまり、夫が外で働くという責任と、妻は家事と育児の責任を果すという性別による固定的な役割分担という構造を意味する。（横山，2002，p. 28-30）

1955年以降「三種の神器」と呼ばれる家電時代に入り、テレビの普及率も高まる一方であった。テレビの歴史を振り返ると、NHKによるテレビの本格放送は1953年2月であり、8月に日本テレビが放送を開始した。60年代頃テレビはまだ新しいメディアだった。その契約件数は1953年で500件、普及率は僅か0.1%だった。その後次第に上昇し、1955年が1万6600件、1960年では68万6000件である。61年には普及率が50%近くまであったという(岩本, 2007, p. 28)。このように、1955年以降から1965年にかけて、テレビが普及していったのだ。

朝ドラが制作されはじめた60年代は、政治的に安定した55年体制の下であり、1955年からの神武景気、1956年に高原景気と続き、1959年は経済成長率が実質14.6%にも達し、岩戸景気に入る。さらに1966年から1970年のいざなぎ景気など、高度経済成長期であった。

落合(1994)によれば、こうした高度経済成長期を背景として、戦後の家族体制が確立し、性別による役割分担の傾向が次第に増えてきた。男女の役割分担は戦後の「現代主婦」の誕生につながる原因となっている。さらに、落合(1994, p. 22-26)は、戦後日本の産業構造の変化に伴い、「それまでの農家や自営業者を中心とする社会から、雇用者すなわちサラリーマンを中心とする社会に変わった」と指摘した。女性労働力率について、落合は19世紀末以来どん底となっている時期—1975年頃に注目した。女子労働力率は戦前から低かったのではなく、かつて農業社会の女性は男性と一緒に働きもしたし、家事労働も行ったりした。女性の労働力率を分析する際よく提起されている「M字型曲線」⁹を使い、落合は各年代別女子労働力率のカーブを比較し、「M字の底が最も深いのは団塊の世代(1946—50年)」と指摘した。M字型の谷が一番深いということはつまり、主婦、専業主婦となり、単に家事労働を行う女性が最も多いということである。

「現代主婦」の量的増加を背景に、朝の時間帯に主婦が視聴する番組として見られるようになった朝ドラの形成には、主婦の存在が不可欠の要素だと指摘したい。朝ドラの成立は経済の戦後体制、家族の戦後体制にあたる時期である。その背景として、家電製品の大衆化に伴いテレビの普及率が急速に上昇したことがあげられる。さらに、産業構造の変化に伴い、「夫は仕事、妻は家事と育児」という性別役割分業が進み、女性が主婦となることは、人生のライフサイクルとして一般化した。このように、主婦になっていく女性たちの増加が見えた60から70年代を背景にし、朝ドラは主婦に見られる番組として、その視聴率、人気を上昇させたのである。

4.2 まとめ

朝ドラの初期作品は、ラジオ小説から考案され、テレビ小説という形として成立した。このように、朝ドラは初めからテレビ小説として方向づけられ、制作された。やや文学性のある

1961—1965年までの作品を経て、1966年の『おはなはん』以降、形式と内容が変化した。この変化の理由は、視聴者の反響がよいため「女の一代記」という形式を取り始め、定着したことがあげられる。その変化の背景には、視聴者の積極的受容があったといえる。

活字メディアは『おはなはん』の人気を証明している。記事分析によると、この作品は婦人層、特に主婦の人気を博したことがわかった。さらに映像分析によると、ドラマの中の視聴者に愛された陽気な女性ヒロインは、現在周知されている「たくましく生きていく」朝ドラのヒロインの原型となっている。

ここで改めて説明したいのは、制作側の立場からは、朝ドラの成立当初、女性をターゲットにするというより、「テレビ小説」への挑戦という側面の意義が大きかったことである。朝ドラを「女性の見る番組」にしたのは、番組の形式の確立に深く関わった視聴者であると考えられる。4.1で指摘したように、主婦、女性からの支持を得てきた初期の朝ドラは、その路線を築いて、80年代に全盛期を迎える。また、『おはなはん』は、形式、内容、視聴者のあらゆる面において、「女の一代記」という重要な原型を確立した。この「女の一代記」という原型は、初期以降の作品を考察する際にも極めて重要な手がかりになると考えられるのである。

References

- 井上輝子・江原由美子。(Eds.). (2005).『女性のデータブック第4版』. 東京: 有斐閣.
- 岩本賢児.(2007).「日本映画に見る家族のかたち」. In 岩本賢児 (Ed.),『家族の肖像—ホームドラマとメロドラマ』(pp. 7-46). 東京: 森話社.
- 落合恵美子.(2004).『21世紀家族へ』(3rd ed.). 東京: 有斐閣. (First edition published 1994)
- 小野田勇.(Writer). (1966-1967).『連続テレビ小説 おはなはん(総集編) 前編 全5巻セット』 [VHS video cassettes summarizing an entire serial TV drama]. 東京: NHK ソフトウェア.(2001)
- 小野田勇.(Writer). (1966-1967).『連続テレビ小説 おはなはん(総集編) 後編 全5巻セット』 [VHS video cassettes summarizing an entire serial TV drama]. 東京: NHK ソフトウェア.(2001)
- 「きょうから「娘と私」 本式放送はわが国で初めて」.(1961, April 3).『朝日新聞』(Tokyo morning ed.), p. 5. Retrieved January 15, 2010, from 聞蔵 デジタルニュースアーカイブ・フォーライブラリー.
- 黄馨儀.(2009).『テレビにおける女性イメージの一考察—NHK朝の連続テレビ小説から見た日本の女性像—』. Unpublished master's thesis, 同志社大学, 京都, 日本.
- 国立社会保障・人口問題研究所.(n.d.).『少子化統計情報』. Retrieved January 15, 2010, from <http://www.ipss.go.jp/syoushika/site-ad/index-tj.htm>
- 小林由紀子.(2009, January 27).「2009年立命館大学講義『日本文化の源流を求めて』」.『読売新聞』(evening ed.), p. 12.
- 坂本佳鶴恵.(1996).『〈家族〉イメージの誕生—日本映画にみる〈ホームドラマ〉の誕生』. 東京: 新曜社.
- 瀬地山角.(1996).『東アジアの家父長制—ジェンターの比較社会学』. 東京: 勁草書房.
- 田村和人.(2009).「テレビ局のアーカイブス」. In『テレビCM研究 Vol.2 No.2『シンポジウム報告集』 テレビ文化は残せるか—著作権・アーカイブス・コマーシャル—』(pp. 2-3, pp. 36-40). 京都: 京都精華大学表現研究機構.
- 「TV40年連続テレビ小説「娘と私」の成功」.(1994, January 10).『読売新聞』(Tokyo evening ed.), p. 9. Retrieved January 15, 2010, from ヨミダス歴史館サービス.
- 独立行政法人国立女性教育会館., & 伊藤陽一.(Eds.). (2006).『男女共同参加統計データブック—日本の女性と男性—2006』. 東京: ぎょうせい.
- 鳥山拓.(1987).『日本テレビドラマ史』. 東京: 映人社.

- 成島庸夫.(1990).「ホームドラマにみる・テレビ・メディア意識の変容」.『横浜市立大学論叢 人文科学系列』, 41(1/2/3), 41-59.
- 西野知成.(1998).『ホームドラマよどこへ行く—ブラウン管に映し出された家族の変遷とその背景—』. 東京: 学文社.
- 牧田徹雄.(1976).「NHK連続テレビ小説の考察」.『NHK放送文化研究年報』, 21, 79-94.
- 松平誠.(2003).「テレビドラマにおける家族と家庭」.『生活文化史』, 43, pp. 27-32.
- 妙木忍.(2009).『女性同士の争いはなぜ起こるのか』. 東京: 青土社.
- 村松泰子.(1975, October).「テレビドラマの描く女性像」.『文研月報』, 25, 10-29.
- 山村賢明.(1978).『日本人と母』. 東京: 東洋館.
- 横山文野.(2002).『戦後日本の女性政策』. 東京: 勁草書房.
- 「立命館大学講義『日本文化の源流を求めて』」.(2009, January 27).『読売新聞』(Osaka evening ed.), p. 12. Retrieved January 15, 2010, from ヨミダス歴史館サービス.
- 和田悠.(2006).「ジェンダー視点で朝の連続テレビ小説を読む—大森美香と『風のハルカ』考」.『唯物論研究年誌』, 11, 216-241.

週刊TVガイド

- 『週刊TVガイド』.(1962a, March 15). 東京: 東京ニュース通信社.
- 『週刊TVガイド』.(1962b, August 11). 東京: 東京ニュース通信社.
- 『週刊TVガイド』.(1962c, October 20). 東京: 東京ニュース通信社.
- 『週刊TVガイド』.(1963a, March 30). 東京: 東京ニュース通信社.
- 『週刊TVガイド』.(1963b, October 25). 東京: 東京ニュース通信社.
- 『週刊TVガイド』.(1966a, September 9). 東京: 東京ニュース通信社.
- 『週刊TVガイド』.(1966b, November 11). 東京: 東京ニュース通信社.
- 『週刊TVガイド』.(1967a, February 3). 東京: 東京ニュース通信社.
- 『週刊TVガイド』.(1967b, March 31). 東京: 東京ニュース通信社.
- 『週刊TVガイド』.(1968a, January 19). 東京: 東京ニュース通信社.
- 『週刊TVガイド』.(1968b, June-July). 東京: 東京ニュース通信社.
- 「あの顔、あのシーン—思い出のおはなはん大特集」.(1967, February 3).『週刊TVガイド』, p. 3-9.
- 「いやア 参った参ったこの騒ぎ—空前!!おはなはんブームの総決算」.(1967, February 3).『週刊TVガイド』, p. 24-28.

- 『おはなはん』から宇宙中継まで＝66年テレビ界十大ニュース＝. (1966, December 16). 『週刊TVガイド』, p. 26-28.
- 「おはなはんがレコード化 倍賞千恵子の歌、裏はテーマ音楽」. (1966, July 29). 『週刊TVガイド』, p. 26.
- 「おはなはん」と母 [読者サロン] . (1966, August 12). 『週刊TVガイド』, p. 104.
- 「おはなはんに娘誕生 榎山文枝にそっくり」. (1966, July 15). 『週刊TVガイド』, p. 12.
- 「おはなはんの楽しさ [読者サロン]」. (1966, August 5). 『週刊TVガイド』, p. 112.
- 「おはなはんを見終わって [読者サロン]」. (1967, April 14). 『週刊TVガイド』, p. 104.
- 「快調のペース おはなはんは陽気な後家はん 朝の人気者・榎山文枝 [写真特集一面3ページ]」. (1966, September 9). 『週刊TVガイド』, p. 3-5.
- 「かわいいですのう 「おはなはん」で人気沸騰 榎山文枝の熱演ぶり拝見」. (1966, July 1). 『週刊TVガイド』, p. 3-5.
- 「後家入りにきんさらんかい 老若男女がみんな惚れたおはなはんの魅力とは？」. (1966, September 2). 『週刊TVガイド』, p. 32-35.
- 「スタジオ訪問 おはなはん」. (1966, November 18). 『週刊TVガイド』, p. 24-27.
- 「高橋幸治に再度の助命嘆願」. (1966, May 6). 『週刊TVガイド』, p. 12.
- 「テレビこの1年 なんでもベストテン 強い「おはなはん」と「てなもんや三度笠」」. (1966, November 25). 『週刊TVガイド』, p. 28.
- 「テレビでも結婚シーズン 榎山文枝が花嫁に」. (1966, May 13). 『週刊TVガイド』, p. 14.
- 「特集 さよなら「おはなはん」 生かすか殺すかの論争！」. (1967, March 31). 『週刊TVガイド』, p. 34-38.
- 「特別企画：本誌記者座談会 「おはなはん」 最高の人気」. (1966, December 16). 『週刊TVガイド』, p. 26-28.
- 「平凡な女、はなの一代記 榎山文枝、高橋幸治らが出演」. (1966, April 4). 『週刊TVガイド』, p. 92.
- 「横顔紹介『おはなはん』をとりまく人々」. (1966, October 21). 『週刊TVガイド』, p. 28-32.
- 「甦った信長 高橋幸治 NHK「おはなはん」で、こんどは軍人役 拝見」. (1966, March 25). 『週刊TVガイド』, p. 7-10.

NHK連続テレビ小説

- 筒井敬介., & 須藤出穂. (Writer). (1958-1963). 『バス通り裏』 [Television series]. NHK 東京放送局 .
- 篠崎博. (Writer). (1961). 『伊豆の踊子』 [Television series]. NHK 東京放送局 .
- 山下与志一. (Writer). (1961-1962). 『娘と私』 [Television series]. NHK 東京放送局 .
- 山下与志一. (Writer). (1962-1963). 『あしたの風』 [Television series]. NHK 東京放送局 .
- 山下与志一. (Writer). (1963-1964). 『あかつき』 [Television series]. NHK 東京放送局 .
- 田中澄江. (Writer). (1964-1965). 『うず潮』 [Television series]. NHK 大阪放送局 .
- 山田豊. (Writer). (1965-1966). 『たまゆら』 [Television series]. NHK 東京放送局 .
- 小野田勇. (Writer). (1966-1967). 『おはなはん』 [Television series]. NHK 東京放送局 .
- 平岩弓枝. (Writer). (1967-1968). 『旅路』 [Television series]. NHK 東京放送局 .
- 橋田壽賀子. (Writer). (1968-1969). 『あしたこそ』 [Television series]. NHK 東京放送局 .
- 井手俊郎. (Writer). (1969-1970). 『信子とおばあちゃん』 [Television series]. NHK 東京放送局 .
- 田中澄江. (Writer). (1970-1971). 『虹』 [Television series]. NHK 東京放送局 .
- 高橋玄洋. (Writer). (1971-1972). 『繭子ひとり』 [Television series]. NHK 東京放送局 .
- 山田太一. (Writer). (1972-1973). 『藍より青く』 [Television series]. NHK 東京放送局 .
- 楠田芳子. (Writer). (1973-1974). 『北の家族』 [Television series]. NHK 東京放送局 .
- 林秀彦. (Writer). (1974-1975). 『鳩子の海』 [Television series]. NHK 東京放送局 .
- 石森史郎. (Writer). (1975). 『水色の時』 [Television series]. NHK 東京放送局 .
- 橋田壽賀子. (Writer). (1983-1984). 『おしん』 [Television series]. NHK 東京放送局 .
- ジェームス三木. (Writer). (1985). 『滞つくし』 [Television series]. NHK 東京放送局 .
- 布勢博一. (Writer). (1988-1989). 『純ちゃんの応援歌』 [Television series]. NHK 大阪放送局 .
- 井沢満. (Writer). (1989). 『青春家族』 [Television series]. NHK 東京放送局 .
- 大石静. (Writer). (1996-1997). 『ふたりっ子』 [Television series]. NHK 大阪放送局 .
- 鈴木聡. (Writer). (1999-2000). 『あすか』 [Television series]. NHK 大阪放送局 .
- 内館牧子. (Writer). (2000). 『私の青空』 [Television series]. NHK 東京放送局 .
- 岡田恵和. (Writer). (2001). 『ちゅらさん』 [Television series]. NHK 東京放送局 .
- 相良敦子. (Writer). (2009-2010). 『ウェルかめ』 [Television series]. NHK 大阪放送局 .

TV Culture and Women: The Conversion of the Early Morning NHK Television Series, *Asadora*, and its Relationship to Female Viewers
Hsinyi HUANG

There is abundant research on the way women's images have been portrayed in television dramas with regard to the issue of women and the media, but yet few of these studies focus on *asadora*, the early morning television series on NHK in Japan. This series has played a major role in shaping the image of Japanese women to the present day, portraying the life of a woman as she grows from being a daughter, a wife to a mother. By identifying the components and characteristics of *asadora*, this paper will explain not only how this genre started but reconfirm its content and the heroine's image. The paper will also focus on the turnabout of *asadora*, and discuss if and how it is related to female viewers. Based on previous research, *asadora* was initially intended as a literary program, but it seems that its content was changed after the highly popular *Ohanahan* series was broadcast in 1966.

In this paper, I clarified the changing form by revisiting the television drama and articles from selected 60's magazines. In conclusion, the reason of the conversion is strongly linked to the fact that the majority of the audience is female. The *Ohanahan* series in 1966 had a tremendous response from female viewers, most of whom were housewives. This was largely due to the social background of the 1960's. The division of labor that resulted from this period of high economic growth in Japan gave rise to increasing numbers of "modern housewives." *Asadora* has since shifted its theme to the 'biography of a woman', in particular constructing the typical *asadora* heroine: the cheerful and reliable mother who always sacrifices herself for the family. This kind heroine and the similar story lines became the paradigm of *asadora* as known by the general public today. The conversion is an extremely important clue when contemplating the later works of *asadora*.

Keywords:

women's image, *asadora*, gender-role stereotypes, female viewers, media influence